

学童期まで遷延した乳児牛乳 アレルギー症例の検討

にし の やす お
西 野 泰 生

キーワード：遷延性乳児牛乳アレルギー，アトピー性皮膚炎，
全身性即時反応，食物除去療法，学校保健

要 旨

現在12歳の男児であるが、乳児期より牛乳アレルギーを発症し、学童期までアナフィラキシー症状を伴う即時反応を反復した症例である。その間アトピー性皮膚炎、気管支喘息などを発症したが、いずれも小学校入学前に著明改善している。本児のIgE抗体は生後12ヶ月時すでにRIST値3,600 IU/mlと高値を示し、RASTも牛乳クラス6、卵白5、大豆3、ダニ6など多抗原に強い陽性反応を示した。直ちに食物除去療法を開始した結果、鶏卵、大豆は速やかに耐性が得られたが、牛乳のみは耐性獲得が遅れ12歳に至っている。遷延防止には早期のアレルゲン診断に基づく乳児期早期の除去療法が最重要と思われた。また学童期では給食による即時反応、運動誘発性アナフィラキシーも経験されており、学校保健としては公的管理の充実による事故防止が必要と考えている。

はじめに

乳幼児期の牛乳アレルギーは食物アレルギーを代表するアレルギー疾患であるが、早期の治療により多くは幼児期に耐性が得られ、予後も良好とされている¹⁻³⁾。しかし、小中学校生の食物アレルギー調査によれば、牛乳は学童期でも果物類、甲殻類に次ぐアレルゲンとされており⁴⁾、乳幼児期に耐性が得られず学童期に及ぶ症例もあることが明らかにされている。今回乳児期に発症し学童

期に及んだ牛乳アレルギー症例を経験したので、本例を通して遷延する牛乳アレルギーについて考えてみた。

I. 対象および検索方法

対象とした症例1（現在12歳）は、乳児期に発症したアナフィラキシー症状を伴う即時反応が学童期にまで遷延した症例である。症例2は生後3ヶ月より乳児湿疹（卵白IgE抗体陽性）がみられ、さらに経過中牛乳アレルギー症状を併発した症例である。しかし、乳製品除去により速やかに耐性が得られ、その経過から症例1の対照として選択した。いずれも食物負荷試験は行なっていな

Yasuo NISHINO

西野小児科アレルギー科医院

連絡先：〒690-0056 松江市雑賀町433